



Title	Effects of Childhood Maltreatment on Mothers' Empathy and Parenting Styles in Intergenerational Transmission
Author(s)	川口, 優子
Citation	大阪大学, 2025, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/103116
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

氏名 (川口優子)	
論文題名	Effects of Childhood Maltreatment on Mothers' Empathy and Parenting Styles in Intergenerational Transmission (養育困難母親のChild Maltreatment(CM)経験が共感性及び子育てスタイルに与える影響について : CMの世代間連鎖との関連性)
【背景】	
児童虐待(CM)の世代間連鎖を理解することは、その連鎖を防ぐ上で極めて重要である。先行研究では、親の共感性がこのプロセスにおける中核的要因であることが示唆されている。親の共感性とは、子どもの感情や精神状態を適切に認識し、それに共感的に応答する能力を指し、この能力の低下は養育上の困難を引き起こし、結果としてCMの発生リスクを高める可能性がある。したがって、CMの世代間連鎖のメカニズムを包括的に解明し、効果的な介入策を講じるためには、親の共感性を損なう要因およびその養育行動への影響過程を検討することが不可欠である。	
【目的】	
母親の共感に影響を及ぼす要因とその養育行動への変容過程を検討し、CMの世代間連鎖のメカニズムを解明する。	
【方法】	
・全体会員: 25歳から50歳までの対象者の母親55名 (M=41.3, SD=5.4)	
・マルトリ群: 児童相談所によって現在または過去の社会的介入を受けた母親13名 (M=40.4, SD=7.5)	
・非マルトリ群: マルトリ群と年齢をマッチさせた母親42名 (M=41.6, SD=4.7)	
・心理尺度	
ACE (Adverse childhood experience), CTQ-J (Childhood Traumatic Questionnaire of Japanese version)	
IRI (Interpersonal reactivity index; Japanese Version), SDS (Self-rating depression scale), PS-J (Parenting Scale Japanese version)	
・統計的解析	
マルトリ群と非マルトリ群で、人口統計学的特徴、臨床的特徴、コルチゾールレベルについては、各群間の差異を検討するためにカイ二乗検定 (χ^2) およびt検定を実施した。また、母親の被CM体験の有無から育児スタイルまでにおけるパス解析を行い、既存の概念的枠組みおよび理論に基づいたプロセスが存在するかどうかを検討した。	
【結果】	
・マルトリ群の母親は、非マルトリ群と比較して、精神疾患、神経疾患、神経発達障害の有病率やシングルペアントである割合が有意に高いことが示された。一方、教育水準および収入においては、有意に低い傾向が見られた。年齢や子どもの人数については、両群間に有意な差は認められなかった。	
・パス解析の結果、全体群と、マルトリ群の両群において、CM経験が深刻なほど情動的共感が高まることが示され、CM体験は情動的共感性に影響を与える要因の一つであることが分かった。3つ全ての群において、情動的共感性はうつ症状を悪化させ、CMリスクを高めることが分かった。また、マルトリ群でのみ情動的共感性からうつ症状、育児スタイルの間で有意な相関が示されており、CMの世代間連鎖についての可能性が示唆された。	
【考察】	
マルトリ群でのみ情動的共感性からうつ症状、育児スタイルの間で有意な相関が示された一方で、抑うつ症状と育児スタイルとは負の相関を示しており、抑うつ症状が強いほど、育児スタイルが緩和されるという結果になった。マルトリ群では、中程度のうつ症状を持つ母親が最も極端な育児スタイルをとっており、抑うつ症状の重症度の違いが育児の過剰さに違いをもたらす可能性が示唆された。今後はうつ病の重症度やその症状の違いなどと育児スタイルとの関連について調査することで、CMの世代間連鎖に関する重要な知見が得られるのではないかと考える。	
【限界】	
本研究の質問票には、逆境体験や抑うつ症状に関する非常に侵入的な質問が含まれており回答バイアスがある可能性があること、本研究は横断的データに限定されている為、親子の環境の変化の影響を考慮した調査が行われておらず因果関係の推論が制限されること等が挙げられる。	

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏名 (川口優子)		
	(職)	氏名
論文審査担当者	主査 教授	大島郁葉
	副査 教授	上原佳子
	副査 准教授	西村倫子

論文審査の結果の要旨

本博士論文は、児童虐待（CM）の世代間連鎖のメカニズムに着目し、親の共感性と心理的要因がその過程にどのように関わるかを、多角的なアプローチで検討した点に高い評価を与えられます。研究では、母親自身が過去に受けたのM経験の有無による情動的共感性やうつ症状、育児行動の違いを詳細に分析し、マルトリ群と非マルトリ群の比較を行った結果、親のCM経験が精神的・心理的な側面に大きな影響を与えることを明示しています。

特に、パス解析を通じて、CM経験が情動的共感性に影響し、それがうつ症状を増悪させ、結果として育児スタイルを変化させる一連の因果関係を解明した点は、新たな知見を提供し、今後の臨床や介入に役立つと考えられます。マルトリ群に特有の心理的特徴や、抑うつ症状と育児行動との負の相関関係も重要な示唆を含んでいます。

ただし、一部の質問票の内容や横断的研究設計の制約により、因果関係の解釈には注意が必要であることも指摘されます。しかしながら、本研究は、児童虐待の世代間連鎖の理解において重要な枠組みを提示しており、学術的・臨床的価値ともに高いと評価されます。

以上のことから、本研究の成果は博士（小児発達学）の学位授与に値すると判断しました。